

宮崎吐夢が聞き手となり、『業音』出演者全員と対談をするコーナー

# 吐夢の部屋

～『業音』の巻～



第9回 ゲスト：康本雅子

15年前と同様、『業音』の振り付けを担当するとともに、「踊り子」役として出演するダンサー&振付家の康本雅子。芝居と踊りと動きが不思議なバランスで混ざり合う今作の、ダンス創作秘話を探ります。

(※この対談の完全版は劇場で販売する『業音』公演パンフレットに収録します。)

吐夢 康本さんが初めて本格的に振り付けをしたのが、15年前の『業音』なんですよ。

康本 そうです。初めて振り付けをしたのは、『マシーン日記』の再演(2001年)で、1曲だけ松尾さんにお問い合わせされたんです。全編の振り付けは『業音』が初めてだから、本当に思い出がありますね。

吐夢 初演を思い出しても、ダンスがかなりの比重を占めてた気がします。

康本 そういうふうと言われることも多いんですけど、実はそんなに多くないんですよ。『キレイ』や『キャバレー』みたいに、がっつりダンスをやるわけでもないですから。当時、お芝居にああいう形でダンスが混ざるのが珍しかったのかな。

吐夢 でも、康本さんが動くだけでダンスに見えたり、アートに見えてくる。

康本 ああ～。

吐夢 お芝居にダンスを入れるときって、たいていダンスシーンはダンサーさんが踊って、演技シーンは役者がやる。別々なんですよ。あと動きを振付師に全部丸投げする演出家もいるじゃないですか。でも、『業音』はそういうのとも違う。振り付けっぽくない振り付けもあるし。どうやって作っていったんですか？

康本 初演は、まず「オープニングはこの曲でみんな踊る」ってということだけしか決まっていなかったですね。あとは稽古しながら、「ここをちょっと踊りにしようか」とか、松尾さんが「こんな感じ」って動いてみせたのを私が整えたりとか。松尾さんはダンスや動きに対してすごくこだわりがある方だから、いわゆる振り付けっぽくなっちゃうと、松尾さんの中で違うんだろなあと思いながら作っていきました。

吐夢 皆川さんの土下座ダンスとかは？

康本 あれはお任せで(笑)。初演を振り返ると、「ここ松尾さんが勝手にやっています」「ここ皆川さんがいつもの感じでやっています」という個人プレーがいっぱいあったので、私はそんなに振り付けしてないという感覚ですね。

吐夢 康本さんご自身の踊りはどこまで決まってるんですか？

康本 100 パーセント。手首の角度まで振り付けてます。こないだも松尾さんに「ここ適当にやってんでしょ」と言われたんですけど、「いやいやいや、120 パーセント振り付けてますから」とって。

(※この対談の完全版は劇場で販売する『業音』公演パンフレットに収録します。)